

# 雨上がりの川

森沢 明夫 作

(158)

オカヤイツミ 画

## 第六章 それぞれのモノローグ(14)

### 【紫音の話】

もしも、わたしに娘がいたなら……。きつと、この娘くらい年齢なのだろうな……。

そんなことを思いながら、年頃の少女の唇を眺める。

「んーっ、ふわっふわで美味しい」

幸せそうに顔を上げた春香が、笑顔のまま小首をかしげた。

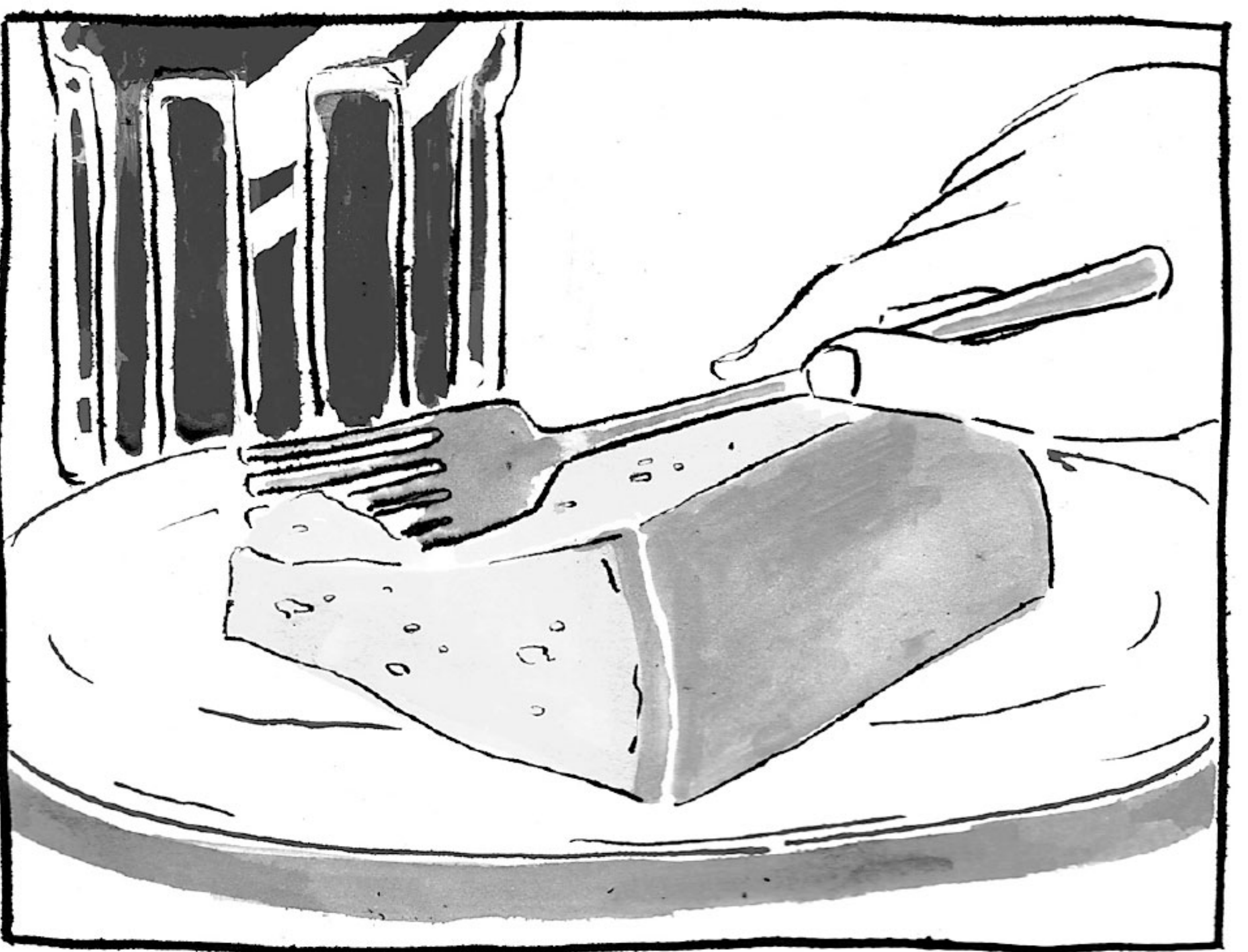
「あれ、紫音さん、食べないんですか？」

「え？ もちろん食べるよ」

思わずハツとしたわたしもフォークを手にした。そして、春香のために雨のなか三〇分も並んで買ってきた一日限定二〇個販売のシフォンケーキを口にする。

なるほど、しっとりとして、ふわふわで、甘さもちょうどいいから食べ飽きない。無糖の紅茶にもよく合う風味だった。人気が出るのも頷ける。しかし、これを食べたいがために、わざわざ三〇分も並ぶかと問われたら、

正直、もう二度目はいいかな、と答えたくなくなる。「ところで、春香ちゃん、調子はどつ？」



「えっと、いい感じです」

「お父さんとも？」

「はい」

春香は会話をしながら、またケーキを頬張った。よほど気に入ってくれたらしい。帰りに残った半分を持たせよう。

「よかった。春香ちゃん、少しずつ流れに乗れてきたみたいね」

もぐもぐと口を動かしながら、春香が「宇宙の、ですか？」と言った。

「そう、宇宙の流れ。春香ちゃんの心が、自然体に近づいてきたんだね」

「紫音さん、わたしを見て分かりますか？」

「そうね」わたしは霊視をするときの目で春香を見て、「うん、分かる。やっぱり良くなってる。オーラが輝きはじめてるから」と答えた。

春香は、安心したように小さく頷くと、ふたたびシフォンケーキにとりかかった。

大人のような受け答えをしたかと思うと、ふいに少女じみた仕草を見せる。春香を見ていて飽きないのは、そういうところなのかも知れない。